

花なり、新花といへども、すぐれざる花は雑色なり、衆目の見る所かはるまじ、今世間に牡丹菊等、手前實生に植出し、さして秀ざる花も上々花といひ、殊に他の花を惡敷と譏るあり、自讚毀他に、て花の好士といふべからず、我他の花を譏らば、人又我が花を惡敷といはん、言悖て出るものは、又悖て入るの聖言必せり、是則花をそえり、合といふにて、花遊に慢心無益なるべしや、われ實生に植出したればとて、不宜花は世間に用ひず、能花は卑下すれども人褒美す、世上のながめとなりて、他の褒美にあふこそ、花の威光にて、花主の規模なれ、總て好花はよく、惡敷花は雑花とほどほどにながめて捨ざるを花好士といふなるべし、佐々羅、山布鳥頭、鷄頭、空穗、瓢葦、絲瓜の川骨破りつつみとはな笠、鼓小花にいたるまで、花盛りに開く時は、一花一景のながめありて、心をやはらげ、鬱氣をひらき、容止を咲するは、万花の景氣なり、尺地にも植べきものは、草花が中にも、藥草は朝夕ながめて、花葉を知り、藥性の宜なるもの百品の葉を摘、黒燒として、藥を調せば、眞の百草霜なるべし、藥店に賣る物いか、疑らくは百藥草はあつめがたきもの也、又は其根をとりて、古人の教のごとくに製法して見たるも、慰ならずや、唐和のかたち、大小の異なるは、土地にもよるべし、草花のるい土地に合たるは、花大りにして、色よくひらく、土地に合ざるは、花形不出來也、牡丹、芍藥、菊等も、花壇の土相應なるを、毎年入かえ吟味して、植れば、花形よく、艷色して、大りにひらく、その根は日に干て、ほそらず、油ぎりて、性よし、野土に植たるは、牡丹、芍藥の根日に干て、ほそくまなびて、各別なるにて、まるべし、其根つよくして、花葉さかふるの理なれば、草花を植作る一助ともなりぬべし、

## 〔傍廂 前篇〕花

いにしへは、木にても、草にても、今日のまへに、花の咲いたるを見ながら、よめるは、たゞ花とのみよみし歌、萬葉集にあまたあり、古今集の頃は、さくらをむねと花といへれど、中には花の鏡となる水は、云々流る、川を花と見て、云々花ぞむかしの香に匂ひける、これらは、梅を花とのみよめ